

# 特集 丁寧な、 死と向き合う

## 患者死亡時に必要な知識と対応

救急医の使命は、救命である。

これは言うまでもないことであり、かつて私も命をつなぎとめるために奔走した1人ですが、現実的には100%完璧に救命を成し遂げることは不可能であり、残念ながら患者が亡くなった場合の看取りやご家族への対応、死後のさまざまな手続きなどもまた、人の命に深く携わる救急医の重要な役割だと考えます。そこで今号の月刊「救急医学」では、この“患者死亡時の対応”に焦点を当てた特集を企画しました。

項目として、経験上判断に苦慮した点や現在法医学者として救急の先生方からお問い合わせをいただく点を重点的に取り上げることとしました。具体的にはまず、国内外の死因究明システムや、死亡診断・死体検案・異状死等の各種届出など、少々ややこしくも感じる体制・制度について現状を整理しつつ、実際の要点・注意点なども解説いただきました。また、死因の究明とその予防につながる診療現場での取り組みとして、外傷例での損傷の評価・温存の重要性や、中毒・虐待など原因を見逃してはならない死亡例での対応や専門機関との連携、死後画像診断の活用などについても、各論的に取り上げます。

各項の原稿は、法医学領域等の死因調査や法律等をご専門とする先生方を中心に執筆いただきました。本誌読者の皆さまにとって、このような領域のエキスパートの知識・知見に触れる機会はあまり多くないでしょう。一方で、法医学の側からみれば、救急医療に従事する方々にさまざまなメッセージを伝えられるチャンスといえます。この、本誌としても初めての試みである貴重な特集号が、救急・法医お互いの知識・認識等のギャップを少しでも埋め、それがひいては患者・家族が少しでも安心できる、より適切で丁寧な“死”への対応、向き合い方につながることを期待し、救急外来必携の一冊となることを願っています。

特集企画ゲストエディター

国際医療福祉大学医学部法医学

本村あゆみ